

水産業関係地域重要新技術開発促進事業

(ハタハタの生態と資源管理に関する研究)

清川智之・安達二朗・北沢博夫・村山達朗

はじめに

島根県におけるハタハタ漁獲量は近年増加の傾向にある。また、鳥取県や兵庫県でも同様の傾向がみられるが、これはズワイガニ、カレイ類、ニギスなどの漁獲量の減少からハタハタに対する漁獲圧を増大させたためであると考えられる。このハタハタの主漁場には島根沖、山口沖も含まれており、鳥取県、兵庫県の沖合底曳網漁船が主として利用しているが、島根県の漁船もその漁場への進出を考えているようである。

しかし、ハタハタの生態、およびハタハタ漁業の実態については未解明な部分が多く、それらを解明、把握することなしに漁業を継続、発展させることはきわめて危険なことであると考えられる。したがってハタハタの資源の保存、管理をすることはハタハタ漁業を維持していくうえで重要なことである。そのためにはまず生態調査を実施し、最終的には保存、管理の方策を見いだすことを目的とする。この調査は秋田、山形、鳥取、島根の4県が共同で実施するもので、期間は昭和63年から3か年が予定されている。なお、詳細については「昭和63年度ハタハタの生態と資源管理に関する研究・事業報告書」に報告されているので、ここでは結果の要約について述べる。

研究方法

島根県から石川県、および韓国のハタハタの年別、月別漁獲量から各県の漁獲動向を整理するとともに、島根県水産試験場試験船島根丸の漁獲物を検討した。また、仁摩港および浜田港の底曳網漁船の漁獲物から山口県～島根県沖におけるハタハタの生物学的特性を検討した。

結果の要約

研究結果は次のように要約される。

- ①島根県でハタハタが水揚げされるのは小底では仁摩・久手港、沖底では浜田港である。
- ②島根県におけるハタハタ漁獲量は、年により増減があるが、近年増加傾向にある。
- ③日本海西区（福井～山口）全体におけるハタハタ漁獲量は30年以上も前から5,000トン前後で安定している。6県の中で最も漁獲の多いのは兵庫県と鳥取県で、2つの県を合わせた漁獲量は全

体の約8割を占めていた。

- ④各県の1980—1986年の平均漁獲量を見ると、漁獲量が最も多い月は鳥取・兵庫では5月、京都・福井・石川では2～3月であった。また各県とも1～5月で年間の漁獲量の大半を漁獲していた。
- ⑤鳥取県では、9月に比較的多くのハタハタを漁獲しているが、これらが漁獲される漁場は隠岐東方および隠岐北方海域である。
- ⑥韓国におけるハタハタ漁獲量は1969年以降、底曳網による漁獲が全体の半数以上を占めている。
- ⑦島根・山口沖に生息するハタハタは、底層の水温が1～5℃の海域で多獲された。しかし、10月の調査では、1～5℃の海域であってもほとんど漁獲がみられなかった。
- ⑧分布の中心となる水深は季節によって変化していた。(160m～200m)。すなわち、春は比較的浅所に、夏は広く、秋は深所に多く分布がみられた。
- ⑨島根・山口沖合で漁獲されるハタハタの年令を体長組成から考えた場合、1才と2才で構成されているものと考えられた。
- ⑩雌雄の成長差は体長が12cm程度で現われる。
- ⑪生殖腺が発達する個体とそうでない個体とを生殖腺重量が1gの線で分けるとすると、雌では1才の個体の大部分が1g以下なのに対し、雄では1才の半数以上が1g以上であった(7・9月)。2才の個体については、大部分が1g以上であった。9月以降、生殖腺に発達のみられた個体は山陰沖漁場から逸散した。
- ⑫漁獲物の雌雄比はほぼ1：1になることが多かったが、冬季には雄の割合が雌に比べて小さくなっていた。この原因には雄1才魚の産卵回帰が影響しているものと思われる。
- ⑬ハタハタの肥満度は、冬から春にかけて低く、夏から秋にかけて高かった。
- ⑭ハタハタは年間を通じてアミ、テミス等甲殻類を中心にホタルイカ、キュウリエソ、エビジャコ類、ワニギス等を食べていた。
- ⑮標識放流の結果から、山陰沿岸のハタハタには北朝鮮(朝鮮半島東岸)に産卵回帰するものが存在することが明らかとなった。また、水深170m付近で5月に放流したハタハタが9月に、水深200m以深で再捕されたことから、高水温期には分布域を深めていることが想像された。なお、現在のところ、再捕率は0.64%である。